

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 安達 真弓

「ベトナム語における指示詞と指示詞に由来する文末詞・感動詞」は、現代ベトナム語の指示詞および同一形態の文末詞・感動詞について、その多様な用法を解明するとともに、指示詞と文末詞・感動詞の関係(なぜ同じ形式が指示詞としてだけでなく文末詞・感動詞としても用いられるのか)について考察したものである。

第1章で考察対象言語のベトナム語、研究方法、用いたデータなどについて説明したのち、第2章では、世界のさまざまな言語における指示詞、文末詞・感動詞、指示詞を対象とした文法化、その結果としての指示詞の多機能化について、先行研究によりながら概観する。

第3章は、ベトナム語の3系列の指示詞(さらに単独形と修飾形に分かれる)を直示用法と照応用法に分け、詳しく分析する。まず、ベトナム語の指示詞の直示用法に関して本論文は、従来主張されてきたような、話し手を中心とした空間を距離に関して排他的に区分し、それぞれの領域にある指示対象を指示するというかたちの説明の不備を指摘する。排他的領域として設定される指示空間に代わり、話し手を中心に同心円状に分布する、互いに重なりあう3つの指示空間を設定することが、ベトナム語指示詞の理解には必要であることを、事例に依りつつ主張する。この説に従えば、話し手に最も近い空間に指示対象があるときは *đây (này)*, *kia*, *đây (ấy)* の3系列すべてが使える(括弧内は日本語の「この」「その」などに相当する修飾形)、話し手からやや離れた空間では *kia* と *đây (ấy)* が、そして話し手から最も離れた空間では *đây (ấy)* のみが使われることを、無理なく説明できる。さらにこの分析は、*đây (ấy)* を「中称」(話し手から中距離にある対象を指示)としてきた従来の説を否定し、これが距離をエンコードしない「中立的な」指示詞であるという結論に至る。この説明は、*đây (ấy)* の広範な照応用法(不特定の指示対象を持つ用法や、いわゆる連動的解釈など)を説明することができ、統一的な解釈を提供する。

第4章では、ベトナム語文末詞のうち、指示詞と同形のものについて、主に自然談話を資料としてその意味・機能を分析する。その結果、*đây* は直接経験に基づく判断、*đây* は情報共有の志向、*kia* は知識差がある場合に使われることを示す。さらに、*này* は事物(名詞句や節)の列挙、*ấy* は共有知識の確認に用いられることを明らかにする。続いて第5章では、指示詞に由来する感動詞を分析し、それぞれ、感情を表出する機能、聞き手の行動を制止する対人的機能、談話構造や発話交替に関わる機能を持つことを明らかにする。第6章では、これまでの分析をまとめ、指示詞と文末詞・感動詞を関係付けられることを主張する。第3章で指示詞の直示用法の説明に用いた、半径が短・中・長の、話し手を共通の中心とする3つの同心円を、制御可能な情報の領域、認識可能な情報の領域、聞き手と共有する意図のある領域と特徴付けることができると結論付ける。

一部の主張には、さらなる検証が必要な部分も残るが、ベトナム語についての深い知識と鋭い洞察力に支えられた分析は十分な説得力を持ち、ベトナム語研究のみならず、指示詞・文末詞研究に大きく貢献することは疑いない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに十分値するものと判断する。